自主的な地域スポーツ活動に関する実態調査
−震災避難者と地域住民によるグラウンド・ゴルフの事例から−

工藤 実里
体育学学位プログラム
指導教員 長谷川 聖修

A survey on voluntary community sports activities
: A case study of Ground Golf by earthquake evacuees and local residents
Minori KUDO

The ultimate purpose of this study is to examine the possibility that voluntary and independent community sports activities can contribute to community building in evacuation centers. To this end, an interview survey and participatory observation method were conducted with participants in a ground golf game run by earthquake evacuees and local residents of the evacuation.
As a result, it became clear that ground golf not only promotes change in the elderly, including a reduction in withdrawal from society, while at the same time providing a place for escapism, but also has the potential to become an important tool for creating "unique spaces." This suggests that independent and self-reliant activities, such as those in this study, can lead to individual autonomy and active communication, and may greatly contribute to the formation of new communities in places of refuge.

【緒言】

東日本大震災は、発生してから 2021 年で 10 年目となる。発生当初 33.4 万人に及んだ避難者は、現在 4.1 万人にまで減少している。しかし、つくば市への避難者の多くは、未だ故郷への帰還が叶わず避難生活を送っていることが報告されている [12)]。つくば市での避難者数が減少しない原因は、福島第一原子力発電所に近い地域、すなわち「帰還困難区域」からの避難者が多いためである。

震災復興の重要課題として内閣府は、コミュニティの弱体化による被災者の社会的孤立を挙げている [7)]。東日本大震災においては、社会的孤立が心理的な影響 [3, 6)] を与えていることや、要介護者やひきこもりを増加させたことで、高齢避難者の孤独死が増加傾向にある [9)] ことが明らかになっている。このことから、避難者の心身に悪影響を及ぼす社会的孤立への対応の一つとして、避難先における新たなコミュニティ形成が強く求められている。

コミュニティ形成に関する研究は多く見受けられる。その中でも、運動が新たなコミュニティを構築させる [1)] ことや、自主活動への参加によって地域活動への参加が拡大する [8)] ことが明らかになっていることから、自主的なスポーツ活動はコミュニティの形成に貢献する可能性があると考えられる。

そこで、近年、ゲートボールに代わる新たな高齢者スポーツとして注目を浴びており、高齢者自らの手で運営ができるグラウンド・ゴルフに着目する。グラウンド・ゴルフは、身体的効果 [11)] や心理的効果 [5)]、社会的効果 [4)] があることが明らかになっているが、コミュニティ形成が急務である震災避難者に焦点を当てた研究は見当たらない。

そこで、本研究では、震災避難者と避難先の地域住民によって運営されているグラウンド・ゴルフの参加者に対してインタビュー調査と参与観察法を実施し、その実態を明らかにすることで、自主的・自立的な地域スポーツ活動が避難先におけるコミュニティ形成に貢献する可能性について検討することを目的とした。

【対象と方法】

1) 対象

東日本大震災の原発事故により茨城県つくば市に避難した後、つくば市 N 公園で 8 年間にわたりグラウンド・ゴルフを実施する中・高齢避難者（男性 2 名・女性 4 名）とつくば市の地域住民（女性 2 名）を対象とした（図 1）。

図 1 対象者がグラウンド・ゴルフをプレーする様子

2) 調査方法

a)インタビュー調査

調査対象者を、避難者主催群・避難者参加群・地域住民参加群の 3 群に分け、それぞれグループでの半構造化面接を行なった。半構造化面接では、表 1 に示すインタビューガイドに従ってインタビューを行なった。その際、対象者の許可を得て、音声データを記録した。

表 1　インタビューガイド

質問内容
①グラウンド・ゴルフ参加のきっかけ ②参加当初の感想 ③現在の感想 ④グラウンド・ゴルフはどのような存在か

b)参与観察法による補足的調査

本研究では、筆者が実際に活動に参加する参与観察法を用いた。その際、筆者はウェアラブルカメラを頭部に装着した状態で活動に参加し、インタビュー調査の補足データとしてプレー中の会話や行動を記録した(図 2)。

図 2 参与観察法による記録の一例

3)分析の枠組み

本研究の分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach；以下「M-GTA」と記す)を採用した。M-GTA は、社会的相互作用に関わり、プロセス的性格を持つ研究、特にヒューマンサービス領域への適応が推奨[2)]されている。本研究は、グラウンド・ゴルフにおける震災避難者と地域住民の交流という社会的相互作用を持ち、8 年の月日を経て築き上げられた本研究のフィールドはプロセス的性格を持つと考えられる。また、震災復興としての側面を持つ本研究は、ヒューマンサービス領域の一つと捉えることができるため、本研究と M-GTA の掲げる研究テーマとの適合性は高いと思われる。

4)倫理的配慮

本研究では、倫理的配慮のもと研究を遂行した。データ収集に関しては、対象者に対して研究目的および方法、プライバシー保護を遵守する旨を説明し、口頭にて同意を得た。

【結果】

分析の結果、13 の概念と 5 のカテゴリーが生成された。概念同士やカテゴリー同士の関係を検討しながら、「震災避難者と地域住民によって実施されているグラウンド・ゴルフ(以下「N グラウンド・ゴルフ」と記す)に対する参加者の認識」を結果図として図 3 に表した。なお、カテゴリーを｛｝、概念を＜＞、具体例を『』で記述する。

N グラウンド・ゴルフは、｛身体活動｝と｛人との交流｝という二つの特性を持つグラウンド・ゴルフを媒介として、避難者と避難先の地域住民とのコミュニティを形成する場になっていた。この場は、対象者にとって｛唯一無二の空間｝であり、引きこもりの改善や一時的な現実逃避などの｛高齢者の変容｝をもたらすと同時に、対象者に｛生きる活力｝を与えている実態が明らかになった。

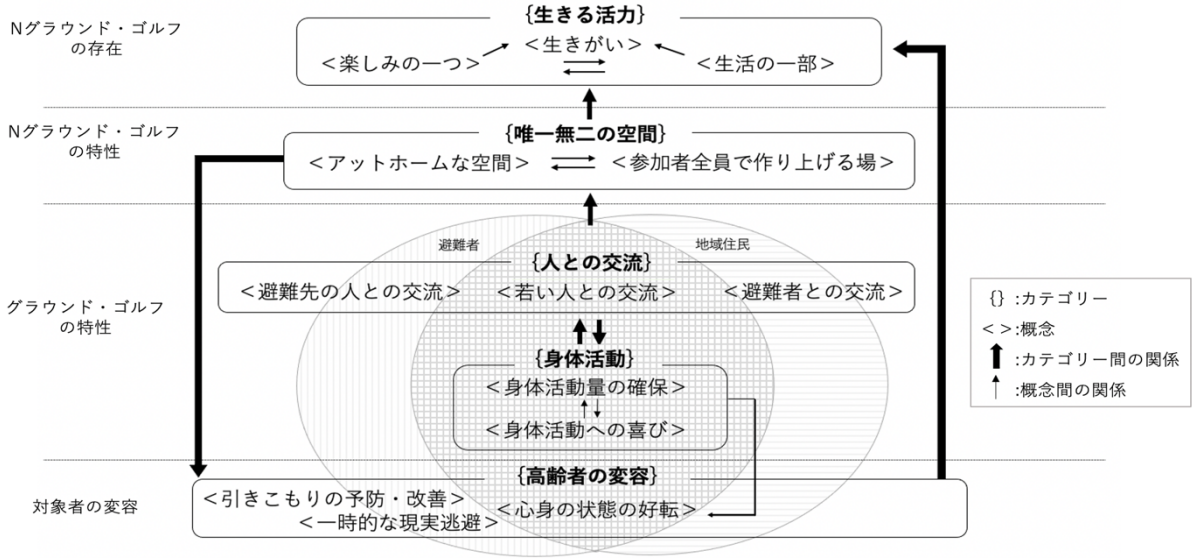

図 3 震災避難者と地域住民によって実施されているグラウンド・ゴルフに対する参加者の認識

【考察】

1)グラウンド・ゴルフの特性

グラウンド・ゴルフは、「移動」を伴うスポーツであり、一日あたりの歩数や身体活動量が増加することが明らかになっている[11]ことから、「身体活動」はグラウンド・ゴルフの重要な構成要素であると言える。本研究においては『(グラウンド・ゴルフが)運動の一部』であり、一日を『すっきり』終えられる活動の一つであるというエピソードが得られ、対象者はNグラウンド・ゴルフを＜身体活動量の確保＞と＜身体活動への喜び＞を得られる場であると捉えていた。このことから、｛身体活動｝はNグラウンド・ゴルフの基盤であると考えられる。

また、グラウンド・ゴルフは「他者との交流」に楽しさがある[13]ことが明らかになっていることから、人との交流はグラウンド・ゴルフの重要な構成要素であると言える。本研究においても、＜避難先の人との交流＞については『楽しみ』、＜避難者との交流＞については『一週間に一度は会って、それ以上に親しくしてもらっている』というエピソードが得られ、対象者同士の多様なコミュニケーションが確認されている。このことから、｛人との交流｝は、Nグラウンド・ゴルフの基盤であると考えられる。

2)Nグラウンド・ゴルフの特性

対象者は、Nグラウンド・ゴルフを、他の自治会等で行なわれているグラウンド・ゴルフと『(雰囲気が)全然違う』と認識しており、Nグラウンド・ゴルフを＜アットホームな空間＞であると捉えていた。また、Nグラウンド・ゴルフは自主的・自立的な地域スポーツ活動であり、対象者も＜参加者全員で作り上げる場＞であると認識していた。このことから、Nグラウンド・ゴルフは対象者にとって｛唯一無二の空間｝であることが明らかになった。

しかし、｛唯一無二の空間｝を作り上げることは容易ではない。Nグラウンド・ゴルフは、避難者と避難先の地域住民によって構成されているが、震災以前は避難者同士でさえもほぼ面識がない状態であった。そのような中、本研究ではグラウンド・ゴルフを通じ、避難者と避難先の地域住民が8年間活動を共にしたことによって、｛唯一無二の空間｝と認識するほどのコミュニティが築き上げられたことが明らかになった。このことから、自主的・自立的な地域スポーツ活動で活動を共にすることがコミュニティの形成に大きく貢献する可能性が示された。

3)対象者の変容

対象者は、Nグラウンド・ゴルフによって『生き生き』するといった＜心身の状態の好転＞を感じていた。このことについては、運動の慢性痛軽減作用[10]が認められていることから、｛身体活動｝が＜心身の状態の好転＞に大きく関係していると考えられる。また、『被災していることをすっかり忘れてやっている』や『何にも参加しなかった私が(地域活動に)混ざるようになった』というエピソードが得られ、Nグラウンド・ゴルフを＜一時的な現実逃避＞や＜引きこもりの予防・改善＞に役立つ場と認識していた。このことから、Nグラウンド・ゴルフは｛高齢者の変容｝をもたらすことが明らかになり、復興支援という視点においての有用性が示唆された。

4)Nグラウンド・ゴルフの存在

『みんな火曜日を楽しみに暮らしている』や『みんな火曜日の午前中を中心に回っている』というエピソードから、対象者はNグラウンド・ゴルフを＜楽しみの一つ＞と捉え、日々の生活の中において譲れない＜生活の一部＞であると認識していることが明らかになった。また、グラウンド・ゴルフが『余生の全て』や『最高の幸せ』であるというエピソードが得られたことから、Nグラウンド・ゴルフは、一時的な楽しさや喜びを超越した＜生きがい＞にまで発展していることも明らかになり、対象者にとってNグラウンド・ゴルフは｛生きる活力｝になっていることが明らかになった(図4)。

図4　笑顔で記念写真を撮る対象者

5)先行研究との比較

古屋ほか[1]は、本研究と同様の対象者に対して調査を実施し、震災復興支援を目的とした体操教室参加の意味づけを明らかにしている。その結果、対象者が体操教室に参加する意味づけについて、「一時的な現実逃避」「身体活動」「人との出会い・ふれ合い」「生活の一部」「暇つぶし」「変化のきっかけ」「楽しみの一つ」という7つの概念を生成している。

本研究と比較すると、＜アットホームな空間＞＜参加者全員で作り上げる場＞＜生きがい＞は、本研究独自の概念であることが読み取れる。

同様の対象者に対してこのような違いが見られたのは、「種目特性」と「運営形態」の違いが関係していると推察される。

古屋ほか[1]の研究における体操は、一般体操と呼ばれ、目的志向の領域のためゲーム性が少ない運動である。一方でグラウンド・ゴルフは、ウンやツキといった実力以外の要素が成績を大きく左右する[5]スポーツである。本研究では、突然起こりうるホールインワンやミスショットといったグラウンド・ゴルフのゲーム性が対象者の楽しさに影響を与え、＜アットホームな空間＞や＜参加者全員で作り上げる場＞といった N グラウンド・ゴルフの特性を形作ったと考えられる。

また、古屋ほか[1]がフィールドとした体操教室は復興支援として支援者が運営しているため、教室への参加は能動的であるものの、活動内容やプログラムに対しては受動的な立場であると言える。一方でＮグラウンド・ゴルフは、避難者が自主的・自立的に運営しているため、グラウンド・ゴルフへの参加のみならず、全ての活動において能動的な立場であると言える。その結果、一人ひとりの自主性が高まるとともに、活発なコミュニケーションが生まれ、生きる活力になるほどの空間が築き上げられたと考えられる。

このことから、グラウンド・ゴルフは、引きこもりの改善や一時的な現実逃避といった｛高齢者の変容｝を促すのみならず、｛唯一無二の空間｝を作り出すための重要なツールとなる可能性が示された。

【結論】

グラウンド・ゴルフで活動を共にすることは、避難者の社会的孤立を防ぎ、避難先でのコミュニティ形成に貢献することや、生きる活力に満ち溢れる充実した避難生活を送るための一方法であることが明らかになり、自主的・自立的な地域スポーツ活動を共にすることがコミュニティ形成に貢献する可能性があることが示唆された。

自然災害が多い我が国において、我々はいつでも避難者という立場になりうる。また、高齢化や核家族化が進む現代において、高齢者の社会的孤立はもはや避難者だけの問題ではない。本研究がより良い地域コミュニティを形成するための道筋の一つとなり、人々の暮らしをより豊かにするための一助となることを期待する。

【引用文献】

1 古屋朝映子，長谷川聖修(2016)：震災避難者の語りからみる体操教室参加の意味づけ-福島県双葉町から茨城県つくば市への避難者の事例から-，筑波大学体育系紀要，29(2)：139-148

2 木下康仁(2003)：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践.弘文堂.

3 Masaharu Maeda, Misari Oe(2014):Mental Health Consequences and Social Issues After the Fukushima Disaster, Asia Pacific Journal of Public Health, 29(2)：36-46

4 宮本晋一(2007)：高齢者スポーツの持つ可能性－グラウンド・ゴルフの「楽しさ」を規定する社会学的要因と効果－，沖縄大学人文学部紀要，10：97-107

5 森楙，湯地宏樹(2020)：高齢者スポーツとしてのグラウンド・ゴルフの特性-広島市井口台 GG クラブ 16 年間のデータの数量分析-，広島修大論集，61(1)：123-140

6 本谷亮(2013)：東日本大震災被災者・避難者の健康増進，行動医学研究，19(2)，68-74

7 内閣府(2012)：「平成 24 年版防災白書」(2022.1.29) http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h24/index.htm

8 織田遥，菊地眞海，山内菜実，竹中響，阿部弥喜，大市美希，大西竜太，平野美千代(2020)：健康づくり自主活動参加者が捉える活動参加による変化と地域活動への参加との関連，日本公衆衛生看護学会誌，9(3)：146-155

9 産経新聞(2013)：「被災 3 県“孤独死”81 人仮設生活長期化で課題」(2022.1.29) http://sankei.jp.msn.com/politics/news/130911/lcl13091116250000-n1.htm

10 仙波恵美子(2019)：運動療法による疼痛緩和のメカニズム:エピジェネティクス修飾の網羅的解析，科学研究費助成事業研究成果報告書(2022.1.29) https://kaken.nii.ac.jp/file/KAKENHI-PROJECT-15K08677/15K08677seika.pdf

11 芹沢幹雄，大石哲夫，松井恒二，冨田裕一郎(2009)：高齢社会における生きがいとしてのスポーツに関する研究(2)-ライフレコーダによるグラウンド・ゴルフ愛好者の身体活動量と活動強度の測定-，静岡県立大学経営情報学部研究紀要第 21(2)：51-60

12 つくば市(online)「東日本大震災避難者支援」(2022.1.29) https://www.city.tsukuba.lg.jp/kurashi/anshin/shinsai/1000686.html

13 富川拓，炭谷将史，多胡陽介(2008)：高齢グラウンドゴルフプレーヤーの語り(その 1)，聖泉大学人間学部人間心理学科紀要論文，聖泉論叢，(15)：255-270